

された。竹内オサム「児童文学館のマンガ資料」、土居安子「児童文学館の翻訳作品」、永田桂子「児童文学館の絵本資料」、遠藤純「資料の発掘と収集、その価値づけこそ大阪国際児童文学館のすごい機能・役割」という内容で、「児童文学館」の全体像を示していた。これらを読むと、収蔵されている個々の資料の価値がよく分かる。そしてその価値は、「児童文学館」の資料全体が有機的に結びつけられていることはいっそう高められていることも、短い文章のなかでよく示されている。その有機的結合を作ってきたのは、専門の研究者である館員である。資料と館員が一体化して、資料の価値がいっそう高いものになった。

コラム「すごいぞ 大阪国際児童文学館」は『日本児童文学』誌から「児童文学館」への応援歌として構想されたのかもしれないが、結果的にはレクイエムになってしまった。日本の児童文化がどれほど大きなものを失ったかは、これから次第に明らかになる。児童文化としてのみの喪失ではなく、それは日本の文化全体の、そして国際的な文化の喪失でもあることが、これからさまざまな影響を及ぼしてくるだろう。

あっさりとして「児童文学館」を潰すことを最終的に決定した橋下徹大阪府知事は、それは子どものための図書館だということ以上の認識は持たなかったようである。そういう誤認が、最終的に「児童文学館」を潰すことになった。

「児童文学館」は、基本的には児童文化や児童文学を研究する人のための研究資料館であった。すなわちそれは、東京・上野公園にある国立の国際子ども図書館と同一の性格のものであって、いわば東日本と西日本を代表しあう存在だった。わたしは東京に住んでいるので、原則的には国際子ども図書館を利用するが、そこにはない資料を「児童文学館」に利用に行ったり、複写を送ってもらったりしたことも一度や二度ではない。

しかし、こうして児童文学館を利用する人——つまりその本質を知る人は、残念ながらほんの少数である。だから橋下知事の認識を覆すことはできなかった。

これまでの「児童文学館」の理念や活動に、何も問題がなかったわけではないだろう。いちばん根本には、児童文学とは何かという認識について、「児童文学館」独自のものがあったことである。「児童文学館」には児童文学の範囲を狭く限定したうえで、それを「完璧主義」で取り扱うとする傾向があった。今になってそういうことを言い立てても始まらないが、その「完璧主義」を再検討することも必要だろう。一九八四年五月の開館から四分の一世紀にわたる「児童文学館」の活動のすべてを、プラスもマイナスもきちんと認識して歴史化することが、「児童文学館」に関わった人々を中心にした関係者に残された仕事の一つである。